
白鳥のへんてこな謎

細桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白鳥のへんてこな謎

【Nコード】

N7459I

【作者名】

細桜

【あらすじ】

齊穩寺を負かしたく、白鳥は彼に謎を出す。

（前書き）

タイトル通り、へんてこな謎です。

斉穩寺は嫌な奴だ。

それが、白鳥が持つ彼の印象だ。そんな彼をぎゃふん、と言わせたく、ぎゃふんと実際に言う人などいないが、とにかく彼を敗北させたとい、白鳥は常日頃思っている。

その方法が思わぬ所からやってきた。というより、白鳥がそれを見つけた。その方法は、斉穩寺にある謎を出すことだ。そして、斉穩寺が間違った答えを言ったら思いつきり笑ってやるのだ。

その謎を出すべく、白鳥は斉穩寺がいつもいる場所にやってきた。街の図書館。

斉穩寺は常にと言っていていい程ここで本を読んでいる。辞書位ある分厚い本を読んでいる訳ではなく、小学生向けの児童書を読んでいるのだ。

「よお、斉穩寺」

読書スペースでズッコケ三人組を読んでいる斉穩寺に、声をかける白鳥。

斉穩寺は顔を上げると、

「……」

何も言わずに本へと顔を戻す。

白鳥は斉穩寺から本を取り上げる。

「ちよつと話があるんだけどいいか？」

「本を取り上げるのがお前の頼み方なのか？」

斉穩寺は見下すように言う。

この言い方が白鳥にとってかんに障るのだ。

「俺が出す謎を解いたらこれを返してやる」

白鳥は本をひらひらと見せつける。

「お前は館長か？ それとも作者か？」

「いいから俺の話を聞け」

白鳥は斉穂寺の前に座ると、相手を睨みつけるように喋りだす。
「俺が実際に体験した話しただけ——」

屋敷の主は今日、友人やその家族を招いてホームパーティをしていた。その中に、白鳥もいた。屋敷の主と白鳥の父が友人なので招待されたのだ。

その他の招待客は、それぞれの分野で成功を収めた人ばかりで、日本画家にトランプett奏者、プロレスラーにプロサッカー選手と様々であった。

パーティーも終わりに近づいた時、ドゴン！ と大砲の様な音がした。

「何の音？」

誰かが言つて、パーティー会場が静かになる。音の手がかりを掴もうと誰もが耳を澄ましている。

「あの音は、主人の部屋からかしら？」

屋敷の主の妻が言う。

「あら？ 夫がいないわ」

夫人は部屋を見渡すと、首を傾げる。

「もしかして夫の身に何か！」

夫人は目を見開いて部屋を出て行く。

白鳥たちは夫人の後を追う。

夫人は二階にある部屋の前に来ると、ドアを激しく叩く。

「あなた！ 何かありましたの！」

白鳥たちも追いつくが、どうすればいいのか分からずただ立っている。

夫人はドアノブに手を掛ける。

カチャリ、と音がしてドアが開く。

「あなた！」

夫人が部屋に入る。

途端、

「きゃああああああッ！」

と、悲鳴が上がる。

それを聞いた白鳥たちが部屋の中に入る。

部屋の壁際に、頭から血の流し、腕のありえない所が曲がっている、館の主人が倒れていた。ズボンの裾が上がっていて、足首には痣がある。その目は見開かれていて、一ミリも動かない。主人が倒れている側の壁には、下から三十センチぐらいの所が大きくへこんでいる。

その隣に立ち尽くしているのは、招待客の一人であるプロレスラーの男がいた。

「それがどうした？ プロレスラーが殺したただけだろ」

斉穂寺は面倒くさそうに言う。

白鳥は唇の端を上げる。

「問題はこれからだ。お前が言ったとおりプロレスラーが館の主人を殺したんだ。でも、どうやってプロレスラーが主人を殺したのか言おうとしないんだ。お前は、どうやってこ殺したのか分かるか？」

「適当な鈍器で殴ったんだろ」

斉穂寺は白鳥の手から本を奪おうとする。

「違う。部屋にはそのような物はない」

白鳥は、斉穂寺の手を払いのける。

「なら殴り殺したんだろ」

「その男の手にはなんの外傷もない。人を殴り殺してなんお怪我もないなんておかしいだろ」

「なら、壁に叩きつけて殺したんだ。壁もへこんでいたみたいだしな」

「でも、壁がへこんでいるのは、人の膝ぐらいの所だぞ。どうやってそこに叩きつけたんだよ。それに、腕が骨折している理由や足首

に痣がある理由を説明出来るか」

齊穩寺は頬杖について俯く。

それを見た白鳥は、次に出て来る言葉を想像してニヤニヤと笑う。
「腕の骨折や足首の痣、それに壁のへこみの位置、そして、プロレスラー。あり得ないことだけど……」

そう言つて齊穩寺は顔を上げる。

「何だ。参ったと言うか」

満面の笑みの白鳥。

「ジャイアントスイングで殺した、とか？」

「！」

白鳥の顔が凍り付く。

「本当にそうなのか」

齊穩寺は白鳥の反応を見て、呆れたように息を吐き出す。

「君は、その技について誤解してるよ。その技じゃ、人を壁に叩きつけて殺せるまでの威力は出せない。普通に叩きつけた方が殺せるよ」

齊穩寺は、呆然としている白鳥の手から本を取り返すと、何事もなかったように読み始めた。

白鳥は、指をわなわなと動かすと、

「覚えていろよ！」

叫んで走り去っていった。

おわり

(後書き)

読んでくれてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7459i/>

白鳥のへんてこな謎

2011年1月8日19時59分発行